

モーゼス・マイモニデスの宗教観

山 我 哲 雄

1. モーゼス・マイモニデスとその生涯

モーゼス・マイモニデス (1135年頃-1204年), すなわちユダヤ的な呼び方ではモーシェ・ベン・マイモンは, 12世紀後半に主としてエジプトで活動した, ユダヤ教史上最大の法学者かつ哲学者であり, 優れた医者でもあった⁽¹⁾。ユダヤ人は現在でもしばしば, ユダヤ教の偉人に敬意を表す際の慣習 (アクロニウム) に従い, 「ラビ・モーシェ・ベン・マイモン」の頭文字を取って, 「ラムバム (RAMBAM)」の略称で彼を呼ぶ⁽²⁾。

モーゼス・マイモニデスは1135年頃, アンダルス (すなわち当時のスペインのイスラム教徒支配下の地域) の中心都市コルドバで, ユダヤ教学者 (ラビ) の家系に生まれた⁽³⁾。

コルドバは, 8世紀にスペインがイスラム化されて以降, ウマイヤ朝の西方における拠点として, また, 東方におけるその滅亡後はスペインで生き残った後ウマイヤ朝の首都として繁栄し, 西方イスラム世界における通商, 文化, 学術の中心として長く栄えた。1031年に後ウマイヤ朝が内紛で滅びた後も, 差し当たっては, コルドバの西方イスラム世界における経済的, 文化的中心としての重要性は維持された。哲学者イブン・ルシュド (アヴェロロス) の活動に示されるように, 学問研究も引き続き盛んであった。

コルドバには, 古くから数多くのユダヤ人が居住していた。コルドバにはユダヤ人街もキリスト教徒街もあり, 町にはインターナショナルでコスモポリタンのな雰囲気満ちてい

た。もともとイスラム教徒にとって, 同じ一神教信仰と預言者の伝統を持つユダヤ教徒とキリスト教徒は「啓典の民」(アフル・アル・キターブ) であり, 異教徒とは扱われず, むしろ「庇護民 (ズインミー)」であって, 人頭税 (ジズヤ) と地租 (ハラージュ) さえ支払えば保護の対象となる存在であった。コルドバのイスラム教徒支配者は, 特に寛容で, 同地に住むユダヤ教徒はほぼ完全な信教の自由と自治を与えられ, 商業や文化や学問の分野で自在に活動することができた。特に, 勤勉で読み書きに巧みなユダヤ人は, 通商の分野で活躍して経済的繁栄を享受するだけでなく, 学者や医師といった知識階級で活動する者が多く, 宮廷の官僚として出世する者も少なくなかった⁽⁵⁾。

マイモニデスの家系は, 代々コルドバのユダヤ人社会の指導者を出した名家であり, 父のラビ・マイモン・ベン・ヨセフも, ラビとしてユダヤ教信仰の指導者の一人であるばかりでなく, 同地のユダヤ法廷の判事 (ダヤン) を勤めた名士であった。少年マイモニデスは, 裕福な家庭の知的な雰囲気の中で何不自由なく育ったようである。

ところが, マイモニデスがまだバル・ミツヴァ⁽⁶⁾を受けるか受けないかという時期の1147年頃, スペインの状況が大きく変化した。北アフリカのアトラス山脈に興ったベルベル人の一派が熱狂主義的なイスラム革命を起こし, ムワッヒド朝を創設して, 海を渡ってスペインにまで押し入ってきたのである。「ムワッヒド」という語自体, 神の唯一性を指すアラ

キーワード: マイモニデス, ユダヤ教, キリスト教, イスラム教, ノアの7戒

ピア語「タウヒード」に由来するので、スペインでは彼らは「神の唯一性を唱える者」という意味で「アルモハド」とも呼ばれた。タウヒードはイスラム神学の根幹であるから、すべてのイスラム教徒はこれを信奉しているはずであるが、このグループは、特にその徹底を原理主義的に強調した、ということなのであろう。

彼らはコルドバをも征服し、イスラム教徒には(学問を含む)異教的な文化と絶縁し、イスラム法を厳格に遵守することを迫り、ユダヤ教徒とキリスト教徒にはイスラム教への改宗を強制した。改宗を拒み、伝来の信仰をあくまで貫こうとする者は、死か、逃亡を迫られた。「剣かコーランか」という常套句は、イスラム教徒に敵愾心や偏見を抱くヨーロッパ人がでっち上げた捏造である、ということが最近ではよく言われるが、この時代のムワッヒド朝の急進派は、実際にそれに近いことをやっただけではない。

マイモニデスの一家も、ほとんど着の身着のままの状態のコルドバから逃亡することを余儀なくされ、最初の10年ほどは、スペイン南部を転々とする生活を強いられた。1159年頃、一家は北アフリカに渡り、古くからユダヤ人共同体があり、知人も多かったモロッコのフェズに住むことにしたが、ここもムワッヒド朝の支配下にあったため、一家は公的にはユダヤ教の信仰生活を行うことができず、イスラム教徒を装いながら、いわば「隠れユダヤ教徒」として息をひそめる生活を強いられた⁽⁸⁾。この間、放浪の時期を含めて、知的好奇心旺盛な若きマイモニデスは、父や各地のユダヤ教指導者、学者たちからユダヤ法学や、哲学、自然学、医学などを学んだ。マイモニデスは、すでに10代の終わりか20代の初めには、論理学の用語法や暦の計算法についての書物を著していた。フェズにいた約6年間には、集中して医学の勉強を行うことができたらしい。これが後に、マイモニデスの生

活を支えることになる。

ユダヤ教徒にとって、イスラム教徒を偽装することはそれほど難しいことではない。アンダルス生まれのユダヤ人はアラビア語をほとんど母語としていたし、どちらの教徒も豚肉は食わず、男性は割礼を受け、大人になれば髭をはやし、ターバンを巻いて、ゆったりとした長衣を着ていたので、外見上はほとんど見分けがつかなかった。ティフィリンやタリートを身に着けた正式の礼拝は、自宅の中でひっそりに行えばよかった。イスラム教徒が毎日唱える信仰告白(シャハーダ)のうち、前半の「アッラーの他に神はなし」という定式句については、ユダヤ教徒としても何の異存もなかった。「アッラー」はアラビア語で「神」を指す普通名詞であり、アラビア語を話すユダヤ人やキリスト教徒は、自分たちの神を「アッラー」と呼んでいたからである。それゆえ、主として問題になるのは信仰告白の後半の「ムハンマドはアッラーの使徒である」と、メッカに向かったの礼拝ぐらいであったが、これも生き残るための「方便」として同地のユダヤ人の間では大目に見られていた。

ところが、マイモニデス一家がフェズに定着した頃、同地のユダヤ人の中に、イスラム教徒を装い、ムハンマドの名を信仰告白するのは背教であり、背教よりは殉教を選ぶべきだ、と主張する急進運動が起こった。これに対し、マイモニデス父子は生存のために改宗者を装うことは罪に当たらないと、偽装改宗を擁護する文書を書いて論陣を張った。父ラビ・マイモンが書いたのが『慰めの手紙(イッゲレット・ハ・ネハマー)』(1160年頃)であり、マイモニデス自身が書いたのが『背教についての手紙(イッゲレット・ハ・シェマド)』(1162年頃)である⁽⁹⁾。結果的に後者が、マイモニデスの著作として最初に公刊されるものとなる。

しかし、ムワッヒド朝の支配者の交代に伴い、1165年頃からユダヤ人への圧迫がより厳

しくなり、フェズでも偽装改宗が発覚してユダヤ教指導者が処刑されたり、逮捕されるという事態が起こったため、マイモニデス一家は、再び逃亡を余儀なくされる。彼らは、ムワッヒド朝の支配からできるだけ離れたいという思いと、信仰の原点に触れたいという望みから、海難の危険を冒して「エレッツ・イスラエル」、すなわち聖地パレスチナに向かう。しかし、当時のパレスチナは第一次十字軍(1096-99年)後のキリスト教徒支配の時代であり、ユダヤ人はエルサレムからは追放され、一家が上陸した港町アッコでも、モスクやシナゴグのほとんどはカトリックの教会に改造されてしまっているありさまで、ユダヤ人は200家族ほどしかおらず、しかも「キリスト殺しの子孫」としてしばしばキリスト教徒から迫害を受けていた。マイモニデス一家は、エルサレムの聖所跡や民族祖アブラハムの墓のあるヘブロンへの巡礼は果たしたものの、生活の基礎を築くことができず、1年も経たないうちに、エジプトへの移住を考え始めた。ムワッヒド朝の支配していた北西アフリカとは異なり、エジプトはシーア派のファーティマ朝が異教徒に対しても比較的寛容な統治を行っているという噂が聞こえてきたからである。

そこで一家は、1166年、まずはアレクサンドリアに渡り、次いで内陸の商業都市で、現在のカイロの旧市街に当たるフスタートに移り住んだ。当初は、商才のあった弟のダビドが宝石交易で成功したので主として一家の生計を支え、マイモニデスは学問に専念し、まずはすでにフェズで着手していたユダヤ教の法典『ミシュナ』の注解に全力を傾注し(1168年頃完成)、次にユダヤ教の口伝律法を集大成する『ミシュネー・トーラー』(「第二の律法」の意味)に十年がかりで取り組んだが(1180年頃完成)、この間に父のラビ・マイモンが死に、さらには一家の大黒柱であった弟ダビドもインド方面の商旅行で事故死し

たので、マイモニデスは医師として働き一家を支えるようになる。

同時に、マイモニデスのユダヤ教への学識と優れた判断力はエジプト在住のユダヤ人の間でも評判になり、彼はラビとして、また1170年頃からは、まだ30代半ばであったにもかかわらず、エジプトのユダヤ人共同体の首長(ライース・アル・ヤフード)としての役割をも果たすようになった。有力なラビと見なされたマイモニデスのもとには、当時のユダヤ教の習慣に従って、エジプトだけでなく、北アフリカ各地やシチリア、パレスチナ、シリア、バグダッド、イエメンなどのユダヤ人共同体から、律法の解釈や運用をめぐる数多くの質問状が送られるようになった。これらにマイモニデスが返信した回答状(ラテン語で「レスポンス」、ヘブライ語では「テシュバー」)が500通以上も残されている。

この間の1171年にエジプトでは政権交代が起こり、サラディンがシーア派のファーティマ朝を倒してスンニー派のアイユーブ朝を創始したが、マイモニデスは、サラディンの側近の大臣でエジプトの実質的な統治者であったアル・カーディー・アル・ファーディーの難病を治したことがきっかけになって、1187年頃、宮廷医に取り立てられ、貴人たちの治療に携わるようになる。その手腕についての評判は、遠くヨーロッパにも届き、「フランク人の王」(おそらくリチャード獅子心王)がマイモニデスを待医に招くことを望んだほどであったが、マイモニデスはこの招請を辞退している。マイモニデスには、喘息や痔の原因論や治療法から、インポテンツの治療法や強精法に至るまで、医学関係の著作も多いが、それらは12世紀のものとしては驚くほど「近代的」で科学的な内容であるという⁽¹⁰⁾。

マイモニデスは宮廷医兼ユダヤ共同体の指導者として、宮廷のあるカイロとフスタートの自宅の間を往復する多忙な日々を過ごしつ、また世界的なユダヤ法学の大家として、

各地からの問い合わせや相談に数多くの回答状を書きつづけて、1987頃から、生涯最後のライフワークとして、合理的な哲学と伝統的なユダヤ教神学とを総合するという壮大な試みに着手し、『迷える者への手引き』(モレー・ネブヒーム)の執筆に心血を注ぎ、1190年についてこれを完成した⁽¹¹⁾。この間、フェズ時代のマイモニデスを知るイスラム教徒から、イスラム教を棄教した嫌疑でカイロの法廷に訴えられる(事実と認められれば死刑)など、人生の波乱は続いたが、家族にも恵まれて、1204年12月、70歳を前にしてフスタートで没した。遺体は遺言によりパレスチナのガリラヤ湖畔のティベリアに葬られたが、このことは、漂白の多い人生の中で1年にも満たないわずかな期間しか滞在しなかったにもかかわらず、マイモニデスの霊的故郷があくまで聖地であったことを示唆している。

2. ユダヤ教法学者、哲学者としてのマイモニデス

ユダヤ教法学者、すなわちハラハー学者としてのマイモニデスの業績は、(1)上述の詳細な『ミシュナ注解』(別名『シラージ』、闇を照らす「発光体」の意味)を著し、特にその中でユダヤ教の信仰あり方の根本をなす「13の信仰箇条」を定式化したこと、(2)『戒めの書』(「セーフェル・ハ・ミツヴォー⁽¹²⁾ト」)を著して、ユダヤ教で伝統的に613あるとされていた成文律法の具体的内容を確定したこと、(3)『ミシュネー・トーラー⁽¹³⁾』(別名『ヤド・ハザカー』、「強い手」の意味)を著し、膨大で複雑なユダヤ教の口伝律法を体系的に集大成したこと、の三点に要約できよう。ユダヤ教の法学における彼の影響力は、「(神から律法を受けた)モーセからモーセ(すなわちマイモニデス)に至るまで、モーセのような者は一人もいなかった」というユダヤの格言にも示されている。

同時に、中世最大のユダヤ人哲学者であっ



マイモニデス関連地図

たマイモニデスは、上述のように、ユダヤ教の伝統的信仰やユダヤ教聖書（すなわち、いわゆる『旧約聖書』）の内容と、アリストテレス流の合理的な哲学的世界観との外見上の矛盾に当惑する人々のために、『迷える者への手引き』を著し、聖書を寓意的、象徴的に解釈することを通じて、擬人的神理解や奇跡への迷信的信仰を退け、理性的認識と信仰の総合を図った。このような、信仰と理性、神学と哲学の統合を目指すマイモニデスの努力が、後のユダヤ人哲学者スピノザや、中世キリスト教神学の大成者トマス・アクィナスなどに多大な影響を与えたことは、わが国でもよく知られている。

3. マイモニデスのユダヤ教観(1)―13の信仰箇条

前述のように、マイモニデスは、ユダヤ教の信仰のありかたを13の信仰箇条ないし原理（イッカリーム、「根本」の意味）にまとめたことでよく知られている。これは、キリスト教やイスラム教の思想との対決や、ユダヤ教の当時有力な分派で、ラビ的な口伝律法を認めないカライ派との論争の経験を踏まえ、マイモニデスが信じるどころの「正統的」なユダヤ教の信仰の大原則をまとめたもので、彼の『ミシュナ注解』の「サンヘドリン篇」第10章への序文に含まれている（「部分」を意味する「ヘレク」という名称で、独立した文書として扱われることもある⁽¹⁴⁾）。その内容を要約すれば、次のようになる。

- (1) 創造者としての神の実在。
- (2) 神の唯一性。
- (3) 神の非物質性。
- (4) 神の永遠性。
- (5) 神のみを礼拝すべきこと。
- (6) 預言者たちが神の靈感を受けて語ったこと。

- (7) モーセが最高の預言者であること。
- (8) トーラー（律法）が神に由来すること。
- (9) トーラーは完全であり、加えても削ってもならないこと。
- (10) 人間の行いについての神の全知性。
- (11) 神による賞罰の報い。
- (12) 将来におけるメシアの到来。
- (13) 死者の復活。

以上を概観しただけでも、マイモニデスのユダヤ教信仰理解がきわめて伝統的で「正統的」（オーソドクス）なものであることが了解できる。すなわち、ユダヤ教信仰とは、万物の創造者たる唯一絶対にして全知全能の永遠の神のみを礼拝し、預言とトーラーの神の由来を信じ、メシアの到来による救いと死者の復活⁽¹⁵⁾を待ち望むものなのである。

4. マイモニデスのユダヤ教観(2)⁽¹⁶⁾ ―マイモニデスのメシア観

ただし、マイモニデスがこれらの個々の信仰原則によって具体的にいかなることを意味しているのかについては、より詳しい検討が必要である。例えば、マイモニデスは12番目の信仰原則として、将来におけるメシアの到来を挙げている。その冒頭の文言を直接引用すれば、次のようになる。「われらは、メシアがやってくることを事実として信ずべきであり、彼が遅れているとは考えるべきでない。たとえ遅くなくても、彼を待っていればよい（ハバクク書2：3）⁽¹⁷⁾」。

マイモニデスによれば、メシアとは「イスラエルの王」であり、聖書にあるとおり、「ダビデの家、ソロモンの子孫からのみ来る」。ただし、合理主義者であるマイモニデスにとって、このメシアは、黙示録的、終末論的な意味で世の終わりをもたらす神的審判者でも、神の受肉者でも、奇跡を行う超人でもない。このことは、マイモニデスが後の著作でメシ

アの時代についてより詳しく述べているいくつかの個所から明らかである。

メシア到来の暁には、離散のユダヤ人が聖地に再び集められ、イスラエルの国家が再建され、そこでの生活では律法が完全な形で実現される。

「王なるメシアが立ち、ダビデの王国を以前のような状態に、すなわち最初のような威厳ある姿に復興させるであろう。彼は聖所を再建し、離散のイスラエルを集めるであろう。彼の時代には、古い律法のすべてが再び施行され、犠牲が再び捧げられ、安息年やヨベルの年が再び律法に定められた戒めの通りに守られるようになるであろう」⁽¹⁸⁾。

「もし、ダビデの家から一人の王が立ち、律法について瞑想し、その父祖ダビデがしたように戒めに心を集中させ、成文律法と口伝律法に規定された掟を守り、イスラエルがトーラーの道を歩むように説き伏せ、その破れを修復し、主の戦いを戦うなら、彼はメシアであると考えられてよい。もし、彼がこれらのことを成功裏に行い、元通りの場所に聖所を再建し、イスラエルの離散者たちを集めたならば、彼は間違いなくメシアである」⁽¹⁹⁾。

しかし、マイモニデスによれば、このメシアが超自然的な奇跡を行ったり、通常の人間を超えた神に近い存在であるなどと考えるのではない。歴史上のダビデがそうであったように、メシアは傑出した支配者であり、救助者であるが、あくまで一人の生身の人間にすぎないのである。

「王なるメシアがしるしや奇跡を行うなどと考えるのはならない。何か新しいものを生じさせたり、死者を甦らせたり、あるいはこれに類することをすると考えるのはならない」⁽²⁰⁾。

「メシアの日々になっても、自然界の法則のいずれかが破棄されたり、被造世界に何かまったく新しいものが導入されるなどと、誰も考えないようにしなさい。世界は、通常通りに運行していくだろう」⁽²¹⁾。

預言者イザヤは、メシア到来の暁にはユートピア的な平和が自然界全体に実現し、「狼は羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏し、獅子は牛のようにわらを食らう」(イザヤ書11:6-7)と預言したが、マイモニデスによれば、これは比喩的意味に理解すべきであり、狼や豹のような凶暴な異教徒たちの中でも、イスラエルが平穩に暮らせるようになるという事態を述べたものなのである⁽²²⁾。

メシアはあくまで人間に過ぎないのであるから、ダビデやソロモンが死んだように、メシアもまた、その使命を果たした後、いつかは当然にも死ぬ。「メシアは死に、彼に代わって彼の息子、孫が統治するだろう」。ただしマイモニデスは、メシアの時代には人々が「煩いや困苦」(すなわちストレス!)から解放されるので、「人の寿命が長くなる」と予想しているが⁽²³⁾。

以上のように、マイモニデスの考えるメシアの到来は、終末論的というよりも歴史内在的事態であり、それは理想的ではあるが人間の合理的な思考、歴史的経験の範囲内にある政治的性格の出来事なのである。

5. マイモニデスのユダヤ教観(3) —改宗者と信仰の普遍性

このように、マイモニデスのユダヤ教信仰は現実主義的、政治的性格が強いが、必ずしも偏狭な民族主義に貫かれたものではない。なぜならマイモニデスにとって、ユダヤ教信仰は、決してアブラハムの子孫としてのユダヤ人だけのものではなく、全人類をも包摂する普遍性を持ったものだからである。

前述した、イザヤ書の「狼は羊と共に宿り」という預言の解釈に関連して、マイモニデスは、「彼ら(異教徒たち)はすべて真の宗教を受け入れ、もはや略奪も破壊もしようとはせず、イスラエルと共に正しい仕方でも快適な生を営む」⁽²⁴⁾とも述べている。彼はまた、メシ

アは、「全世界がこぞって主に仕えるための準備をする」と述べ、ゼファニヤ書3：9の「その時わたしはもろもろの民に清きくちびるを与え、すべて彼らに主の名を呼ばせ、心をつにして主に仕えさせる」という一句を引用している⁽²⁵⁾。

このようなマイモニデスの考え方をより具体的に示すのが、ユダヤ教への改宗者に対する彼の態度である。当時、少数ではあったようだが、イスラム教徒がユダヤ教に改宗する例があった。イスラム教では棄教や異教への改宗を死をもって禁じているので、これはまさに命がけの決断であったろう。そのようなユダヤ教に改宗したオバデヤという人物が、生粋のユダヤ教徒からいわばある種の「いじめ」を受け、マイモニデスに相談の手紙を書いた。旧約聖書に同名の預言者もいる「オバデヤ」というのは、「ヤハウエのしもべ」を表すヘブライ語の人名であるが、おそらくもともと「神（アッラー）のしもべ」を意味する「アブドラー」という名前のアラブ系のイスラム教徒が、ユダヤ教への改宗に際してほぼ対応する意味の「オバデヤ」に改名したのであろう。彼の迫害者であるユダヤ人たちは、オバデヤはもともとユダヤ人でないのだから、祈りや祝福の際に「われらの父祖の神」とか、「われらをエジプトから導き出されたあなた」などと唱えることをオバデヤに禁じた、というのである。自分はどうしたらよいのかと、オバデヤはマイモニデスに手紙で相談した。

これに対するマイモニデスの解答は、非常に心温まるものである。彼はまず、「あなたはそれらのことすべてを、定められた順序で少しも変えることなく、唱えて差しつかえありません」と述べ、ユダヤ人の開祖アブラハムを引き合いに出して次のように述べている。

「われらの父祖アブラハムは、人々に心を開くことを教え、彼らに真実の信仰と神の唯一性を示しました。・・・それ以来というも

の、ユダヤ教を受け入れ、トーラーに規定されている通りに御名（＝神）の唯一性を信仰告白するものは誰でも、われらの父祖アブラハム―彼に平安あれ―の信徒のうちに数えられるのです。それらの人々は、アブラハムの家に属する者です。なぜなら、彼らを正しい道に回心させたのは彼（＝アブラハム）だからです。彼がその言葉と教えを通じて同時代の人々を回心させたのと同様に、彼は、自分の子らや彼の後の諸世代に残した彼の遺訓を通じて、未来の諸世代をも回心させているのです。ですから、われらの父祖アブラハム―彼に平安あれ―は、彼の道を守る彼の敬虔な子孫たちの父であり、また、彼の信徒たちとユダヤ教を受け入れるすべての改宗者の父なのです⁽²⁶⁾」。

アブラハムの信仰に従う点で同じ信仰を共有するなら、血によるアブラハムの子孫（ユダヤ人）でない者でも別の意味で「アブラハムの子」であり、両者の間に本質的に違いはないとするマイモニデスの理解には、キリスト教の異邦人伝道を行い、ユダヤ人、すなわち肉によるアブラハムの子孫でなくとも、アブラハムの信仰を受け入れ、「信仰によって生きる人こそ、アブラハムの子である」と断じたパウロの主張（ガラテヤ書3：7）を髣髴とさせるものさえある。

「あなたは主に信仰告白したのですから、あなたと私たちの間には何の区別もありません。私たちになされた奇跡のすべては、いわば私たちとあなたとになされたのです。イザヤ書にこう言われている通りです。『主に連なっている異邦人は言うてはならない、主はわたしをその民からすっかり分かれた、などと』（イザヤ56：3）。あなたと私たちとの間には何の区別もありません。あなたは、断固として、『われらを選ばれた方』、『われらに与えてくださった方』、『われらを取ってご自身のものとされた方』、『われらを選び分かれた方』といった祝福を唱えるべきです。

なぜなら、創造主―彼に誉れあれ―は本当にあなたを選び、あなたを諸国民から分ち、あなたにトーラーを与えられたのですから⁽²⁷⁾。

マイモニデスにとって、生まれは異邦人であっても、13の信仰原則を信じ、トーラーを正しく守る者はすべてユダヤ教徒であり、その救いに関しても生粋のユダヤ人との間に何ら区別はないのである。

6. 「ノアの7戒」

―マイモニデスの異教徒観

創世記9章によれば、人類を滅ぼす大洪水を箱舟で乗り切ったノアに対し、神は二度と再び洪水を起こさないと約束し、同時に血の摂取の禁止などを含む一連の戒めを与えた(創世記9:1-7)。タルムード時代のユダヤ教では、ここに以下の7つの戒めがあると解釈され、それらはユダヤ教のトーラーがモーセを通じて与えられる以前のものであるがゆえに、「ノアの子孫」である全人類を拘束するものと考えられた⁽²⁸⁾。逆にいえば、この「ノアの7戒」を守っている限り、ユダヤ人以外であっても必ずしも「偶像崇拜者」とは見なされないのである。これらの「7戒」の多くは、内容的に、後の十戒(出エジプト記20章)の倫理的掟を先取りしている。

- (1) 司法(法廷)制度を設け、それにより正義を守る義務。
- (2) 神を冒瀆することの禁止(偽証を含む)。
- (3) 偶像崇拜の禁止。
- (4) 性的不品行(姦淫や近親相姦)の禁止。
- (5) 殺人の禁止。
- (6) 盗みの禁止。
- (7) 生きた動物から肉を切り取って食べることの禁止(血の摂取の禁止)。

マイモニデスもこの伝統を尊重し、そこに独自の解釈をも加えている。まず、マイモニ

デスによれば、これらの7戒のうち、最後の第7戒を除く6つの戒めは、ノア以前にすでに最初の間人アダムに命じられていた⁽²⁹⁾。

第二に、異邦人がユダヤ教に改宗した場合には、613の成文律法と膨大な口伝律法のすべてを守らねばならないが、改宗はあくまで本人の自由意志と主体的決断の問題であり、「そう望まない者たちに律法と戒命の受け入れを強制してはならない」。これに反し、ノアの7戒は改宗の如何にかかわらず、すべての人間に要求される普遍的な掟であり、モーセは神により、「ノアの子孫に課された戒めの受け入れを全人類に強制するように命じられた」のであって、「それらを受け入れない者は誰であれ死に定められる」とされる。ヨシュア記やサムエル記には、イスラエル人の敵であるカナン人やアマレク人が「男も女も、老いも若きも区別なく、滅ぼし尽くされた」という凄惨な記述があるが、マイモニデスはこれを合理化して、それは無条件のジェノサイド(民族絶滅)ではなく、それらの人々が「ノアの7戒」の受け入れを拒んだことによる、と解釈している⁽³⁰⁾。

第三に、マイモニデスによれば、「7戒を受け入れ、それらを良心的に守る者(異教徒)は、『義なる異教徒』の一人であり、来たるべき世に分け前を持つ」とされる⁽³¹⁾。「来たるべき世」(「オーラム・ハ・ヴァ」)とは、メシア到来時の救いにあずかることを示す定型句であるので、ここでは「7戒」を守る異教徒に、ほとんど敬虔なユダヤ教徒同様の救いが約束されていることになる。

ただし、この個所の本文には、このことが成り立つための一つの条件が付けられており、異教徒がノアの7戒を受け入れる動機が、神がトーラーにおいて彼らにそのように命じ、また「われらの師モーセを通じて、トーラーが与えられる以前にすでにノアの子孫にそれらの履行が義務づけられたことが知らされた」からである場合に限られる、とされている⁽³²⁾。

これに反し、「もし、彼自身の理性に基づく考察の結論の故に、彼がそれを遵守するのであるなら、彼は、寄留の異国人や異教徒中の義人の一人とは見なされず、彼らの賢者たちの一人とも見なされない⁽³³⁾」とされている。すなわち、ノアの7戒の受け入れは、あくまで神の権威と啓示によるのでなければならず、普遍的な合理的考察による自然法的な認識の結果ではないのである⁽³⁴⁾。

いずれにせよ、マイモニデスにとって、改宗者を除く異教徒にも2種類あることは明らかである。すなわち、一方は「ノアの7戒」すら受け入れない偶像崇拜教徒であり、これは全面的に否定される。聖書のカナン人やアマレク人がそうであり、「星を崇拜するサービア人の宗教共同体の生き残り」である、「北の果てのトルコ人や、南の果てのインド人の中の不信者たち⁽³⁵⁾」がそうである。他方は、「ノアの7戒」を守る者たちで、彼らはメシア来臨時に再建されるユダヤ教国家において「寄留の異国人」(ゲール・トーシャヴ)として保護の対象となり、一定の救いにあずかることも可能な存在である。

7. 『イエメンへの手紙』におけるキリスト教とイスラム教

それでは、マイモニデスとその波乱の多い生涯において、直接、間接に接触した主たる宗教であるキリスト教、イスラム教について、彼は具体的にどのように考えていたのであるうか。残念ながら、マイモニデスの著作中に、ユダヤ教以外の宗教について特に組織的に論じたものは存在せず、また、キリスト教やイスラム教徒を前述の「ノアの7戒」と結びつけて論じた箇所も、著者の知る限り見当たらない。そこで、この問題を考えるためには、著作のあちこちに散在する断片的な論述を総合して考察しなければならない。

キリスト教とイスラム教について最も集中

的に触れたマイモニデスの著作は、1172年頃書かれた『イエメンへの手紙』(「イッゲレト・テマーン」)⁽³⁶⁾であろう。ただし、この手紙は書かれた事情も内容もかなり特殊なものであるので、取り扱いには注意が必要である。

前述のように、ファーティマ朝からアイユーブ朝時代にかけてのエジプトでは、ユダヤ教徒はかなりの信教の自由を甘受できたが、アラビア半島南部のイエメンにいたユダヤ人は、同地のシーア派イスラム教徒の支配者から改宗を強制されていた。また、ユダヤ人の中からはメシアの先駆者を自称するカリスマ的人物が登場して人心を動揺させていた。こうした混乱の中で、同地のユダヤ人指導者ラビ・ヤコブ・ベン・ネタンエル・アル・ファイユミーがマイモニデスに手紙で行動の指針を求めたのである。これへの返書が、『イエメンへの手紙』である。自分自身、かつてアンダルスやモロッコでムワッヒド朝の改宗強制の辛酸をなめたマイモニデスが、イエメンで苦しむ同信者たちに深く同情と共感を覚えたことは明らかである。この手紙でマイモニデスは、ユダヤ教の真理性と、イスラム教およびその先行形態であるキリスト教に対するユダヤ教の優位性を強調し、苦難の中で信仰を保つように激励している。

自分自身イスラム教徒のただなかに住み、しかもそのイスラム教徒の高官に仕える身のマイモニデスにとって、公然とイスラム教を貶める著述をすることには危険が伴ったであろう。しかし、彼は、不安を覚えつつも、「公共の福祉の方が自分の個人的安全よりも優先されるべき」という思いで筆を執ったと告白すると共に、手紙の内容が異教徒に知れることのないように注意してほしい、と懇願している⁽³⁷⁾。

それゆえこの手紙には、自分の個人的な体験にも重なる義憤と怨念と敵意がこもっており、通常鋭利な論理と冷静な合理性を特色とするマイモニデスの全著作の中にあって、最

も人間くさい情念のこもったものであると見なしてよからう。

この手紙の最初で、ユダヤ人とその宗教を滅ぼそうとした者には、武力を使う者（アマレク、センナケリブ、ネブカドネツアル、ハドリアヌス）と、より知的で「議論を用いる者」（シリア人、ペルシア人、ギリシア人）があったが、やがてより危険な、武力と説得の両者を組み合わせたより有効な方法を用いる新しい敵が現れるようになったとし、この計画を最初に採用した者が「ナザレのイエス」だったとして、イエスについて次のように記している。

「彼はユダヤ人だった。彼の父は異教徒だったが、彼の母がユダヤ女性だったからである。というのも、われらの律法の諸原則によれば、ユダヤ女性と異教徒の間やユダヤ女性と奴隷の間に生まれた子供は、正統的（なユダヤ人）⁽³⁸⁾だからである」。

マイモニデスはどうも、「処女降誕」したとされるイエスが実はマリアとローマ人の間にできた私生児だったという、ユダヤ人の間に古くから広まっていた噂を採用しているらしい。彼はさらに続けて、こう記す。

「彼は人々を強いて、自分こそ、トーラー中の当惑の的となるような諸点を解明するために神によって遣わされた預言者であるとか、すべての先見者たちが予告していたあのメシアであるとか信じ込ませた。彼は律法とその諸規定がすべて無効になり、その戒めのすべてが破棄され、その禁令すべてが破られるような仕方⁽³⁹⁾で解釈した。しかし、彼の評判がわれらの民衆の間に広がる前に、われらの賢者たち—彼らに至福の記憶あれ—は彼の計画に気づき、彼に相応な罰を割り当てたのである」。

マイモニデスにとって、イエスが偽メシアであり、彼が十字架で処刑されたことが彼の偽メシア性の証拠であることは、『ミシュネー・トーラー』にある次のような言葉からも明らかである。

「もしある人物が完全に成功することがなく、それどころか殺されてしまえば、彼がトーラーで約束されたメシアではないことは明白である。・・・自分自身がメシアだと思い込んだナザレのイエスさえ、法廷によって死刑にされたではないか。これはダニエルが預言したことである。こう書かれている通りである。『あなたの民のうち荒くれ者が、みずから高ぶって事をなし、幻を成就しようとするが、失敗するだろう』（ダニエル書11：14）。というのも、これ以上大きな失敗があるだろうか。すべての預言者が、メシアはイスラエルを贖い、彼らを救い、彼らの離散者たちを集め、戒めを裁可すると断言している。ところが彼（イエス）のもたらしたことといえば、イスラエルを剣で滅ぼし、彼らの残りの者たちを散らしたり辱めることだった。彼はトーラーを変えてしまい、世界を誤らせて、神以外⁽⁴⁰⁾のものに仕えるように仕向けたのである」。

興味深いことに、マイモニデスは、イエスは新しい一宗一派を創始するつもりはなかったとして、彼の活動を後のキリスト教とは区別しているが、両者が共に否定的に見られていることには変わりがない。

「かなりの時が経ってから、一つの宗教が出現し、エサウの子孫たち⁽⁴¹⁾によってその起源が彼（イエス）にまで遡られることになるが、新たな信仰を興すことはこの人物の意図ではなかった。イスラエルの個人にとっても集団にとっても、彼は害をなすことができず、彼が何をなそうと、彼らの信仰は微動だにしなかった。彼の説く事柄の支離滅裂さが誰にも明白だったからである。最後には、彼はわれらに敗れ、活動を止めさせられた。彼はわれらの手に落ちたのだ。彼の（その後の）運命はよく知られている通りである」。

イエスの後に興ったのが、イスラム教であるが、マイモニデスは『イエメンへの手紙』の前半の文脈では、その創始者を「狂人」と呼び、「ムハンマド」と名指しすることを慎

重に避けている⁽⁴³⁾。彼は、自分のための道を拓いた彼の先駆者（すなわちイエス）を範としたが、彼はさらにさまざまな規則の条項（おそらくは、ユダヤ教の律法にないイスラム教固有の戒律）を付け加えて、「彼の有名な宗教」を創出した。すなわち、それがイスラム教なのである⁽⁴⁴⁾。

マイモニデスによれば、「これらの男たちはいずれも、自分たちの教えをわれらの神聖な宗教と同じレベルに置くことを目指した。しかし、神に由来する制度と人間の習慣を混同するのは、両者〔を区別するため〕の知識を欠いた愚か者だけである⁽⁴⁵⁾」。両者の相違をマイモニデスは、理性を持ち、神の創造した複雑にして精妙な内臓を持つ人間と、木や金属で作られた、中身のがらんだような偶像の違いに譬える。すなわち、外見上は多少似ていなくもないが、中身がまったく違うというのである。

言い換えれば、マイモニデスはユダヤ教とキリスト教やイスラム教の間に、一定程度の外見上の共通性ないし類似性があることは認めているわけである。ただし、その類似性は、われわれが想像しがちな唯一神信仰とか預言者的精神、「書物の宗教」という点にあるのではない。そうではなく、それらがいずれも、ある程度整備された倫理と戒律の体系を持つという点に存するのである。

「聖書の秘められた意味や律法のより深い意義を知らない無知な者なら、同様に、われらの宗教と他の宗教を比較して、われらの宗教には他の宗教と何らかの共通性があると信じるようになるかもしれない。これは彼が、トラーには禁止命令と肯定命令があり、他の宗教にも赦されている行為と禁じられている行為があることに気づくからである。どちらにも、宗教的な守られるべきことの体系があり、肯定的な規定と否定的な規定があり、守るか守らないかに応じて賞罰が定められている」。

ただし、「真の神的宗教」（すなわちユダヤ教）の絶対的な優位は、その肯定的な規定にも否定的な規定にも、「より深い意味」があるという点に存する。

「その一つ一つのすべてが、人の完全性を求める努力を助け、卓越性を獲得するうえで、のすべて障害物を取り除いてくれる。これらの戒めは、大衆とエリートの双方がそれぞれの能力に応じて、道徳的および知的徳性を獲得することを可能ならしめる。こうして、神に属する共同体は卓越したものとなり、二重の意味での完全性に到達する。第一の完全性とは、人がこの世における人生を最も快適で自分に合った条件のもとで過ごすということである。第二の完全性とは、各人がその生来の力に応じて、知的な目標に到達するということになる」。

これに反し、他の宗教の教えは、ユダヤ教の教えの皮相な模造品に過ぎず、キリスト教やイスラム教がいくらユダヤ教を模倣してみても、「サルが人間の動作をまねするのを見て人が笑ったり微笑んだりするように、椰揄や嘲笑的になるのが関の山⁽⁴⁶⁾」であるという。

それではなぜ、その卓越した神の法を持つユダヤ教徒が、劣った宗教のキリスト教や特にイスラム教徒の下で辛苦と屈辱にあえぎ続けねばならないのだろうか。この問題に対するマイモニデスの答えは、きわめて「旧約聖書的」であり、預言者エレミヤや列王記の著者たちの認識と大幅に一致している。

「思い起こしてほしい、同信の人々よ。われらの罪の膨大さの故に、神がわれらをこの民族、すなわちイシュマエル人（＝アラブ人）のただ中に投げ捨てられたことを。彼らはわれらを厳しく虐げ、われらに対して有害で差別的な法を課した。聖書がわれらに、『われらの敵が自らわれらを裁くであろう』（申命記32：21）とあらかじめ警告していた通りである。彼らのようにわれらを陵辱し、侮辱し、虐げ、憎悪した民族はかつてなかったほどだ⁽⁴⁷⁾」。

しかし、ユダヤ教徒は信仰を捨てるべきではない。なぜなら、苦難は永遠に続くわけではなく、最終的な救いは神の摂理に含まれているからである。

「一時は彼らが勝ち誇っているように見え、長期であれ短期であれ、支配的な地位にあるように見えようとも、彼ら（の支配）がいつまでも続き、持ちこたえるわけではない。われらには、はるか昔からの変わらざる神の確約がある。われらに対して背教の判決が下され、怒りが起こるたびに、最後は神がそれを破棄してくださるだろうという確約が」⁽⁴⁸⁾

マイモニデスによれば、イシュマエル人（すなわちアラブ人）による圧迫は、すでにヘブライ語聖書中の『ダニエル書』に預言されていた。すなわち、ダニエル書7章には4匹の巨獣が出てくるが、さまざまな時代に多くの人々がこの寓意的幻を自分たちの時代に引き付けて解釈したように、マイモニデスはそれらをローマ、ペルシア、ビザンチン、アラブの諸帝国と解釈しているのである。

「これは、神の靈感を受けたダニエルの預言に予告されていたことである。それによれば、未来のある時点で、真の宗教に類似した宗教と一つの聖典と口伝の教えを持った男が登場し、傲慢にも神が自分に啓示を下した、自分は神と会話したなどと主張し、その他にも法外な主張を行うのである。すなわちダニエルは、ローマ帝国滅亡の後にイシュマエル人の帝国が台頭する次第を描写するに際して、あの狂人の出現と、ローマ、ペルシア、ビザンチン諸帝国に対する彼の勝利について暗示していたのである」⁽⁴⁹⁾

しかし、ダニエル書の幻によれば、この第4の巨獣もついに神によって滅ぼされる。「わたしが見ている間にその獣は殺され、その体は損なわれて、燃える火に投げ込まれた」（ダニエル書7：11）。マイモニデスによれば、ダニエルは、「神がやがてはこの人物を、彼の偉大さやその権勢の長い持続にもかかわら

ず、彼の先駆者たちのまだ生き残っている信奉者たち（キリスト教徒）ともども滅ぼすことについて、神から知識を与えられていた」⁽⁵⁰⁾のである。

8. 他の著作におけるキリスト教とイスラム教

前節の最初にも記したように、『イエメンへの手紙』における悪意のこもったとも言える激情的なキリスト教、イスラム教批判には、特殊な執筆事情とも関わる例外的な要素が関わっており、マイモニデスの他の著作におけるキリスト教とイスラム教についての言及は、より距離を取った冷静沈着なものが多いように思える。まず、最初に注目すべきは、マイモニデスの哲学的名著ともいえる『迷える者への手引き』において、ユダヤ教と、キリスト教、イスラム教の共通性に触れている箇所が見られることである。しかしながら、ここでも三者の共通性として指摘されるのは、一神教性でも預言者的性格でも、「聖典的」宗教性でもないし、また『イエメンへの手紙』におけるように、外見上類似した戒律の体系を持っているということでもない。

「われわれ三者、すなわちユダヤ人、キリスト教徒、イスラム教徒に、共通するものがあることは疑いない。それは、世界が時間的に創造されたことを認める点である。このことの妥当性は、奇跡やそれに類するものの妥当性と連動している」⁽⁵¹⁾

マイモニデスがアリストテレスを「哲学者たちの首領」と呼び、その哲学体系とユダヤ教神学の総合を図ったことはよく知られている。しかし、マイモニデスは、哲学的な諸問題のすべてに関してアリストテレスに従っていたわけではない。マイモニデスがアリストテレスに同意できなかった最大の論点の一つが、アリストテレスの説く世界の永遠性であった。この世界観は、神が時間の中へと世界を

創造したと説く聖書的世界観とは相容れないのである⁽⁵³⁾。

「アリストテレスが見たような意味での永遠性への信仰、すなわち世界は必然性に従って存在しており、いかなる自然の変化も起こらず、物事の通常の運行は何に関しても変更することができないという信念は、律法をその根本から破壊してしまい、あらゆる奇跡を必然的に虚偽にしてしまい、律法が提供したあらゆる希望と威嚇を戯言に変えてしまうことだろう。・・・もし、哲学者たちが、アリストテレスの理解したような意味における(世界の)永遠性を証明できたなら、律法の全体が無効になってしまう⁽⁵⁴⁾」。

この点で、神による時間的な世界創造の信仰、すなわち創造以前に世界は存在したかったという観念は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に共通するものと認められる、というわけである。しかし、これ以外の点で、三つの宗教の共通点に関する指摘はない。前述のマイモニデスの論述の続きは、次のようになっている。

「しかし、この二つの共同体(すなわちキリスト教とイスラム教)が扱いに困り、また論議に夢中になっているその他の事柄、例えばキリスト教徒が没頭している三位一体の観念の研究や、イスラム教徒の特定の宗派が没頭しているカラーム(イスラム神学)の研究について見れば、・・・それらはわれらにとっては、いかなる意味でも無用なものである⁽⁵⁵⁾」。

イスラム神学(カラーム)ないしイスラム神学者(ムタカッリム)の議論については、マイモニデスは『手引き』の中で一貫して批判的な姿勢を保っている。より注目すべきは、ここでキリスト教の「特有」の概念として、「三位一体論」が引き合いに出されていることである。マイモニデスのユダヤ教的一神論の立場から見れば、キリスト教の三位一体論が神の唯一性を損なう誤謬であることは明らかである。

三位一体論への批判は『手引き』の他の箇所にも見られる。マイモニデスは、いわゆる否定神学の見地から、人間的な言語では、神の本質については「・・・ではない」という否定的表現でしか適切に述べ得ないと考え、神の属性を分析することに反対する。その際にマイモニデスは、神の属性を数え上げようとする人々を、キリスト教の三位一体論者になぞらえている。

「もし誰かが、彼(=神)は一でありながら、一連の特定の本質的諸属性を持つと信じるならば、その者は言葉では彼(=神)が一であると言いながら、考えでは彼(=神)が多数であると信じていることになる。これは、キリスト教徒が言っていることに似ている。すなわち、彼(=神)は一にして三でもあり、三が一であると言うのである⁽⁵⁷⁾」。

別の箇所でも、マイモニデスは、神の存在の本質について、人間の知識は不完全なことしか知ることができないという文脈の中で、キリスト教の三位一体論とユダヤ教の唯一神信仰を対比している。

「キリスト教徒たちは、彼(神)が三つと考えるが、そうではないと同様に、われわれは彼が一つと考えるが、そうではないのだ⁽⁵⁸⁾」。

したがってマイモニデスにとって、キリスト教は一神教とは言えず、ノヴァックも言うように、ユダヤ教聖書の唯一神観から逸脱した異教、ある種の多神教と見なされるべきものであったにちがいない。

「マイモニデスは、ムハンマドとは異なり、イエスは新しい宗教を興すつもりはなかったけれども、キリスト教はやはり偶像崇拜の一種と見なされるべきだと主張した。彼が三位一体の教説を、異教徒であるかユダヤ人であるかに関わりなくすべての人に要求される一神教にとっての、根本的な妥協だ、と考えていたことは疑いない⁽⁵⁹⁾」。

マイモニデスは、キリスト教世界に暮らしただけではない。彼のキリスト教体験と言えば、

書物によるものや、コルドバやフスタートでの何人かのキリスト教徒との個人的な知人関係を除けば、十字軍支配下の聖地パレスチナに数ヶ月滞在したことだったと考えられる。

そこで彼は、聖地奪還の歓喜と興奮も冷めやらぬ狂信的なカトリック教徒たちの聖像や聖画や聖遺物に覆い尽くされた宗教生活を直接目にしたことであろう。その印象について、筆者の知る限り、マイモニデスは何も書き残していないが、最近マイモニデスの評伝を刊行したイリル・アルベルの次のような推測は、当を得たものと思われる。

「理論的には、彼もキリスト教が聖書に従っていることを知っていた。しかし、マリア、キリスト、諸聖人の立像や肖像は、偶像として彼に衝撃を与えた。それゆえ彼は、キリスト教徒が異教徒であるとの感を拭い去ることができなかつた⁽⁶⁰⁾」。

キリスト教は、偶像や瀆神行為の禁止を含む「ノアの7戒」を守る「義なる異教徒」にも数えられないように思われたにちがいない。この点で、ユダヤ教徒と同様、徹底した唯一神観を持ち、厳しく偶像崇拜を禁じるイスラム教は、キリスト教と異なっている。前述のように、『手引き』の中でマイモニデスは、イスラム神学(カラム)やイスラム神学者(ムタカッリム)を徹底的に批判しているが、それはイスラム神学者たち—おそらくは、ムウタジラ学派やアシュアリー学派、アル・ガザリーなど—の議論の諸前提や論理構成に対する形而上学的ないし哲学的批判であって、宗教としてのイスラムそのものや、その信仰内容に対する批判ではない。

マイモニデスが宗教としてのイスラム教を実際にどう理解していたかは、彼の哲学的著作よりも、彼がユダヤ教指導者として、各地のユダヤ教徒の問い合わせに答える形で書いた回答状、いわゆるレスポンサ(ヘブライ語でテシュヴェアー)の中によく表われているように思われる。

イスラム教からユダヤ教への改宗者の問題に関連して、イスラム教徒は偶像崇拝者(オブデー・アボダー・ザラー)であるかどうか問題にされた際に、マイモニデスは次のように書き送っている。

「これらのイスラム教徒(文字通りには「イシュマエル人」)は決して偶像崇拝者ではありません。それ(偶像崇拜)は、すでに彼らの口からも心からも払拭されています。なぜなら、彼らは一なる神に身を委ねているからです。・・・もし誰かが、彼らが尊んでいる家(=カアバ神殿)が偶像の聖所であり、かつて彼らの祖先が礼拝に用いた偶像がその中に隠してある、と言ったとしても、それが何だというのですか。現在その方位に向かって礼拝する人々の気持ちは、神(文字通りには「天」)にのみ向かっているのです⁽⁶²⁾」。

イスラムからの改宗者が、イスラム教徒はもともと偶像崇拝者ではないと主張したとき、ユダヤ教の教師がその人物を「馬鹿者」呼ばわりしたと聞き、マイモニデスは次のように書き送っている。

「イスラム教徒が偶像崇拝者であることを否定したからといって、あなたの教師があなたを『馬鹿』と呼んだのなら、彼は大きな罪を犯したことになります。あなたの師であっても、彼はあなたに許しを乞うべきです。その後で、彼に断食させ、泣かせ、祈らせなさい。そうすれば、赦しが得られるでしょう⁽⁶³⁾」。

ユダヤ人にとって、ぶどう酒は祭儀に用いる神聖なものであり、偶像崇拜する異教徒の作ったぶどう酒は、ユダヤ教徒は自分で飲むことも、商品として扱うことも許されなかつた。あるとき、イスラム教徒の作ったぶどう酒をどう扱うべきかという議論が起こった。

「七つの戒め(=ノアの7戒)を受け入れた寄留の異国人(ゲール・トーシャブ)については、彼のぶどう酒を飲むことは禁じられています、それで金をかせぐことは赦されています。・・・これらのイスラム教徒(文

字通りには「イシュマエル人」)のように、偶像崇拜(アボダー・ザーラー)を行わない異教徒についても同じです。すなわち、彼らのぶどう酒を飲むことは禁じられていますが、それで金銭上の利益を得ることは許されています⁽⁶⁴⁾。

イスラム教徒は異教徒であり、彼らの作ったぶどう酒はユダヤ教の食物律法に則していないので、それを飲んではいけません。しかし、彼らは偶像崇拜者ではないから、彼らのぶどう酒で商売することはかまわない、というのである。ここでは、イスラム教徒に対して、滅ぼし尽くされるべき偶像崇拜者の異教徒ではなく、前述のようにユダヤ教に改宗せずとも「ノアの7戒」を守る「寄留の異国人」として、むしろ保護の対象となる地位が認められている。それゆえ、全体として見れば、マイモニデスがイスラム教徒を、一なる神を信じ、偶像崇拜を行わない者として、キリスト教徒よりも肯定的に評価していたことは明白である⁽⁶⁵⁾。このことは、マイモニデスが自身でもしばしばイスラム教徒からの厳しい迫害や圧迫を受け、また、各地で同信の徒がイスラム教徒の圧政下にあって信仰の危機に直面している事態に彼が常に心を痛めていたことを考え合わせれば、まことに注目し得る事実である。

ただし、少なくともある一点に関して、マイモニデスはキリスト教をイスラム教よりも肯定的に評価していたふしがある。それは、文書としての「トーラー」、すなわちモーセ五書、ないしヘブライ語聖書全体に対する態度に関わっている。キリスト教は、五書を含むヘブライ語聖書全体を『旧約聖書』として自分たちの正典に取り入れているが、イスラム教徒は事実上、彼らの『コーラン』がすべての「啓典(キターブ)」に取って代わったものと見なしている。

タルムードには、前述の「ノアの7戒」以外のいかなる律法も、異教徒(もちろん改宗

者は除く)に教えるはならないという規定がある⁽⁶⁶⁾。これが現在の異教徒についてもそのまま当てはまるかどうかを問われた際のマイモニデスの回答は、まことに興味深い。彼は、他の律法の戒めをキリスト教徒に教えることは許されるが、イスラム教徒に教えることは許されない、という解釈を示して、次のように述べている。

「それらの戒命(ミツヴォート)をキリスト教徒(ノツリーム)に教え、われらの宗教に導くことは許されていますが、それはイスラム教徒については許されていません。これは、このトーラーは神(文字通りには「天」)の啓示ではないという、あなたたちも知る彼らの信仰の故です。あなたたちが彼らに聖書の何かを教えたとしても、彼らはそれが、混乱した物語や彼らに伝えられた支離滅裂な教理に基づき、彼ら自身の心がでっち上げたもの(すなわち、イスラム教の教義)と矛盾すると考えるでしょう。彼らが誤謬を抱いているので、それは彼らにとって何の証しにもならないでしょう。・・・ただし、割礼のない者たち(キリスト教徒)は、トーラーの(彼らの持つ)版は何も変えられていないと信じています。ただ、彼らはそれを彼らの誤った釈義法で解釈しているのです。・・・しかし、もしそれらの聖書本文が正しい釈義法で解釈されれば、彼らが正しい道に戻ってくるということも可能です。・・・彼らが彼らの聖書中に見出すもので、我々のそれとは異なるものは何もありません⁽⁶⁸⁾。

したがって、マイモニデスにおいては、唯一神を崇拜し、偶像崇拜を行わないという点では、イスラム教の方がキリスト教より高く評価されているが、五書(トーラー)ないしヘブライ語聖書を尊重し、それを神的啓示と認めている点については、キリスト教の方が真の宗教(ユダヤ教)に近く、したがって救いに近いと考えられているわけである。

最後に、人類の信仰の歴史においてキリス

ト教とイスラム教が果たす積極的な役割について、マイモニデスが述べた興味深い文章を紹介しておきたい。それは、『ミシュネー・トーラー』第14巻「士師篇」中の「王たちと戦争」第11章の締め括りにある文章であるが、イエスについての前述の厳しい批判的記述があるために、多くの公刊本においてキリスト教の検閲者の手によって削除されてしまっている部分に含まれる。

ここで問題にされるキリスト教やイスラム教の積極的役割の理解もまた、それらの宗教とユダヤ教が、類似もしくは共通する思想や用語を用いるという事実と関連している。すなわち、キリスト教やイスラム教が世界に広まることによって、真の宗教(ユダヤ教)の基本的な観念や思想が、たとえ錯誤や誤解を含んだり歪められた形であれ、人々の間でさかんに語られ、周知されるようになり、それがひいては、多くの人々が真の信仰へと目を開かれる訓練ないし準備になる、というのである。すなわちそれは、全人類史的に見れば、多神教や偶像崇拜の無明の中にある異教世界に、神の唯一性、その律法、メシア的救いなどの観念や考え方の枠組みを普及させ、彼らを真の普遍的な救いに向けて啓蒙する準備的役割を持つのである。

「人間に、世界の創造主の計画を理解する能力はない。『われらの道は彼(=神)の道と異なり、われらの思いは彼の思いと異なる』(イザヤ書55:8)からである。ナザレのイエスと、彼の後に来たあのイシュマエル人(=ムハンマド)に関連するすべてのことは、王なるメシアのための道を拓き、全世界が一致して主に仕える備えをするためのみにある。・・・というのも、『メシア的希望』、『律法(トーラー)』、『戒命』といったことが、よく話される話題となり、遠くの島々(の人々)や、心や肉に割礼を受けていない多くの民族(すなわち異国人)の間で会話の主題となる。彼らはこれらの事柄や、トーラーの諸戒命につ

いて議論し、ある者は、『これらの戒命は真実のものだったが、もはや効力を失って、拘束力を持たない』と言い、別の者は、『それらには秘められた意味があり、字義通りに解釈されるべきではないのだ』とか、『メシアはすでに来たのであり、それらの隠された意味を明らかにしたのだ』、などと言う。しかし、本当の王なるメシアが現れ、成功し、高められ、上に挙げられるとき、彼らは直ちにそれを撤回するだろう。彼らは自分たちが父祖たちから虚偽ばかりを伝えられてきたこと、彼らの預言者たちや先祖たちが彼らを誤った道に導いたことを悟るだろう⁽⁶⁹⁾」。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三つの宗教が交錯する十字軍時代を生き、しかもキリスト教、イスラム教が圧倒的な力で世界の覇権を激しく争うように見えるなか、厳しい信仰の危機を体験しつつ生きたユダヤ教徒であったマイモニデスにとって、この三つの宗教の関係についての理解は、否が応でも複雑で屈折したものにならざるを得なかったことであろう。

[注]

- (1) 最近の簡明な評伝として、以下を参照。I. Arbel, *Maimonides: A Spiritual Biography* (New York 2001); J. L. Kraemer, *The Life of Moses ben Maimon*, in: L. Fine, *Judaism in Practice* (Princeton 2001), 413-428; J. L. Kraemer, *Moses Maimonides: An Intellectual Portrait*, in: K. Seeskin (ed.), *The Cambridge Companion to Maimonides* (2005), 10-57. 日本語で読める唯一の評伝とも言うべきA・J・ヘッセル『マイモニデス伝』(森泉弘次訳, 教文館)は、残念ながら訳が達意とは言えず、特に巻末の年表には誤りが多い。なお、N・ソロモン『ユダヤ教』(山我哲雄訳, 岩波書店), 68-70.をも参照。
- (2) 日本語的にははなはだ発音しにくい、「ラン

- バン」ないし「ラムバン」と表記してはならない。数世代後のスペインのラビで、マイモニデスの厳しい批判者であったナハマニデス（ラビ・モーシェ・ベン・ナハマニ＝RAMBAN, 1194-1270年）との混同を招くからである。
- (3) マイモニデスの生涯のクロノロジー、特に前半生の年代には不明な点が多いが、ここでは基本的に比較的新しいアルベルのもの（注1参照）に従った。
- (4) 一般的には、マイモニデスは『ミシュナ』の編纂者ラビ・ユダ・ハ・ナーシーの子孫であり、さらにはダビデ王の家系に属するともされるが、これについての確たる証拠はなく、マイモニデス自身もこのことには触れていない。伝説的な要素と見なされるべきであろう。Kraemer, *The Life of Moses ben Maimon*, (注1参照), 413を参照。
- (5) イスラム教徒支配下のスペインにおけるユダヤ人の活躍については、例えば以下を参照。アブラム・レオン・ザハル『ユダヤ人の歴史』（滝川義人訳、明石書店）、285-314; イラン・ハレヴィ『ユダヤ人の歴史』（奥田暁子訳、三一書房）、122-149。
- (6) ユダヤ教の一種の元服式。男子は通常13歳で受け、この時からユダヤ教の律法に従った生活を始める。
- (7) 例えば、小杉泰『イスラーム帝国のジハード』（興亡の世界史6、講談社、2006年）。
- (8) 当時スペインにいたユダヤ人の多くは、スペイン北部やフランスなどのキリスト教圏に逃亡した。マイモニデス一家がなぜ、わざわざムワッヒド朝の本拠とも言えるフェズに移住したのかは謎であり、マイモニデス研究の論争点の一つであるが、ここではこの問題に立ち入ることはできない。
- (9) 英訳は *The Epistle on Martyrdom* in: *Epistles of Maimonides: Crisis and Leadership. Translations and Notes by Abraham Halkin* (Philadelphia 1985), 13-45.
- (10) このうち「喘息論」は、英語・アラビア語の対訳で読める。Moses Maimonides, *On Asthma: A Parallel Arabic-English Text*. ed. and trans. by G. Bos (Provo, UT 2002).
- (11) 英訳は, Moses Maimonides, *The Guide to the Perplexed*. Trans. by S. Pines. 2 vols. (Chicago 1963). 仏訳, 独訳もある。
- (12) 英訳は, M. Maimonides, *The Commandments*, 2 Vols, Trans. by C. B. Chavel (London 1967).
- (13) 英語の部分訳は, Mishneh Torah. in: I. Twersky (ed.), *A Maimonides Reader* (Springfield NJ 1972), 33-227(以下, このアンソロジーはMRの略号で言及). 現在, イェール大学から全体の訳が刊行中。I. Twersky, *Introduction to the Code of Maimonides (Mishneh Torah)* (New Haven and London 1980) をも参照。
- (14) 英訳は, Helek: Sanhedrin, Chapter Ten. in: *MR*, 401-423. N・ソロモン『ユダヤ教』（注1参照）, 219-20. をも参照。
- (15) 『ミシュネー・トーラー』や『迷える者の手引き』では、マイモニデスは必ずしも死者の復活という問題を強調してはいない。後に反対派から、肉体の復活を信ぜず、むしろギリシア的な意味での靈魂の不滅を説いている、と批判され、マイモニデスは、『復活論（マアマル・テヒヤト・ハ・メティーム）』を書いて自己の立場を弁明している。英訳は, *The Essay on Resurrection*. in: *Epistles of Maimonides* (注9参照), 209-245.
- (16) これについては、下記をも参照。D. Hartman, *Maimonides: Torah and Philosophic Quest* (Philadelphia 1976), 153-4; I. Twersky, *Introduction to the Code of Maimonides* (注13参照), 145-6, 450-1; A. Ravitzky, 'To the Utmost of Human Capacity': Maimonides on the Days of Messiah, in: J. L. Kraemer (ed.), *Perspectives*

- on Maimonides. *Philosophical and Historical Studies* (London/Portland. OR. 1991), 221-256;
- (17) *MR*, 422.
- (18) 『ミシュネー・トーラー』第14巻「士師篇」, 「王たちと戦争」11章1節. *MR*, 222.
- (19) 同上11章4節. *MR*, 223-4.
- (20) 同上11章3節. *MR*, 223.
- (21) 同上12章1節. *MR*, 224.
- (22) 同所。
- (23) 『ミシュナ注解』「サンヘドリン篇」第10章への序文. *MR*, 415.
- (24) 『ミシュネー・トーラー』第14巻「士師篇」, 「王たちと戦い」12章1節. *MR*, 224.
- (25) 同上11章4節. *MR*. 224.
- (26) 『改宗者オバデヤへの手紙.』Letter to Obadiah the Proselyte. *MR*, 475-6.
- (27) 同上. *MR*, 476.
- (28) バビロニア・タルムード『サンヘドリン』56-60. 英訳は, *Hebrew -English Edition of the Babylonian Talmud. Seder Nezikin. Sanhedrin* (London 1969), 56a-60b. これについては, さらに, 以下をも参照. *Encyclopedia Judaica*, 1189-1191 Noachide Lawsの項. D. Novak, *The Image of the Non-Jews in Judaism: An Historical and Constructive Study of Noachide Laws* (New York 1983); C.Clorfene/Y.Rogalsky, *The Path of the Righteous Gentiles: An Introduction to the Seven Laws of the Children of Noah* (Jerusalem 1987).
- (29) 『ミシュネー・トーラー』第14巻「士師篇」, 「王たちと戦争」9章1節. *MR*, 221-2.
- (30) 同上8章10節. *MR*, 221.
- (31) 同上6章1節以下. これについては, さらに以下をも参照. J. Levinger, Holy War in Maimonidean Law, in: *Perspectives on Maimonides* (注16参照), 209-220; H. Kreisel, Maimonides' Political Philosophy, in: *Cambridge Companion to Maimonides* (注1参照), 193-220.
- (32) 同上8章11節. *MR*, 221.
- (33) 写本や印刷本, 翻訳の中には, 最後の文を肯定文と解し, 「しかし, 彼らの賢者たちの一人とは見なされる」と読むものもあるが, 否定文の方が元来の本文と思われる. この問題については, *Encyclopedia Judaica*, 1191 (Noachide Law の項); M. Fox, *Interpreting Maimonides: Studies in Methodology, Metaphysics, and Moral Philosophy* (Chicago 1990), 132-3 (n.19)を参照.
- (34) M.Fox, *Interpreting Maimonides* (前注参照), 31-200.
- (35) 『手引き』第3巻29節. *Guide*, 515.
- (36) 英訳は*MR*, 437-462. および, *Epistles of Maimonides* (注9参照), 91-149. 後者は詳細な注と解説付き. 以下の引用は前者による.
- (37) *MR*, 462.
- (38) *MR*, 441.
- (39) *MR*, 441.
- (40) 『ミシュネー・トーラー』第14巻「士師篇」, 「王たちと戦争」第11章の末尾. ただし, この部分は, 多くの印刷本で, キリスト教徒の検閲者によって削除されてしまっている. *MR*, 226.
- (41) 創世記によれば, エサウはユダヤ人の祖先ヤコブの兄で, エドム人の祖先. 英訳者のハルキンは, エサウの子孫とはローマ人だと注記している (*Epistles of Maimonides*, 134. n. 46) が, むしろユダヤ教 (すなわちヤコブ) の (正統性を持たない) 兄弟宗教としてのキリスト教の信徒一般を指すと解してよかろう.
- (42) G. F. Hourani, Maimonides and Islam (in: W. Brinner/S. Ricks (eds.), *Studies in Islamic and Judaic Traditions*, Atlanta 1986, 153-165), 154. は, ここに言及される人物を同定不能の別人物と見るが, 文脈から見てイエスについての言及であることは明白である. 注9にあげたハルキンの訳注, およびフーラニの論文と同一の論文集 (pp. 233-250) にあるD. Novak, The Treatment of

- Islam and Muslims in the Legal Writings of Maimonides, 235を参照。
- (43) ただし、同じ手紙の後半で、マイモニデスは、ムハンマドの登場がすでに旧約聖書に名指しで予告されていたとするイスラム教徒の主張に反駁するために、ムハンマドの名を挙げている。MR, 449-50.
- (44) 『イエメンへの手紙』. MR, 441-2.
- (45) 同上。MR, 442.
- (46) 同上。MR, 442-3.
- (47) 同上。MR, 457.
- (48) 同上。MR, 444.
- (49) 同上。MR, 443.
- (50) 同上。MR, 443-4.
- (51) 『手引き』第1巻71章95a. *Guide* (注11参照), 178.
- (52) 『手引き』第1巻5章17a. *Guide*, 29.
- (53) これについては、特に、K. Seeskin, *Maimonides on the Origin of the World* (New York 2005) を参照。
- (54) 『手引き』第2巻25章55a. *Guide*, 328. マイモニデスは、この点ではむしろプラトンを評価する。プラトンが『ティマイオス』などでデミウルゴス(創造神)による世界の時間的創造を描いているからであろう。『手引き』第2巻13章28b. *Guide*, 283. をも参照。
- (55) 『手引き』第1巻71章95a. *Guide*, 178.
- (56) これについては、特に、W. Z. Harvey, Why Maimonides was not a Mutakallim, in: *Perspectives on Maimonides* (注16参照), 105-114. を参照。
- (57) 『手引き』第1巻50章56a. *Guide*, 111.
- (58) 『手引き』第1巻75章124b. *Guide*, 225.
- (59) D. Novak, The Treatment of Islam and Muslims (注42参照), 235. H. Kreisel, *Maimonides' Political Thought: Studies in Ethics, Law, and Human Ideal* (Albany NY 1999), 39. をも参照。
- (60) I. Arbel, *Maimonides* (注1参照), 50.
- (61) S. Pines, *Guide of the Perplexed* (注11参照), Introduction, cxxiv-cxxxi. および A. L. Ivry, The Guide and Maimonides' Philosophical Sources, in: *The Cambridge Companion to Maimonides* (注1参照), 58-81; W. Z. Harvey, Why Maimonides was not a Mutakallim, (注56参照), 等を参照。
- (62) D. Novak, The Treatment of Islam and Muslims (注42参照), 238. の引用による。
- (63) MR, 477.
- (64) D. Novak, The Treatment of Islam and Muslims (注42参照), 236. の引用による。
- (65) これについては、以下をも参照。I. Twersky, *Introduction to the Code of Maimonides* (注16参照), 452; H. Kreisel, *Maimonides' Political Thought* (注31参照), 39-40, 198.
- (66) バビロニア・タルムード『サンヘドリン』58b-59a, 『アボダー・ザラー』3a.
- (67) イスラム教の公式教義(いわゆる「六信」)によれば、神(アッラー)の啓示を記した「啓典」(キターブ)には、コーランと並んで旧約聖書の律法(五書, タウラー)と詩編(ザブール), および新約聖書の福音書(インジール)も含まれる(これについては、山我哲雄『聖書』(PHP研究所, 2005年), 22-23を参照)。しかし、これはイスラム教徒がモーセやダビデやイエスを預言者としてのムハンマドの先駆者と見なすことに関連する、どちらかといえば名目上のことで、イスラム教徒が実際の信仰生活の上でユダヤ教聖典を尊重することはほとんどない。マイモニデスは特に、ユダヤ人が真のトーラーの啓示を改竄した、とするイスラム教徒の主張に批判的であった。MR, 449-450. を参照。
- (68) D. Novak, The Treatment of Islam and Muslims (注42参照), 244. の引用による。
- (69) The uncensored version of the end of Kings Ch. XI., in: MR, 226-7. これについては、以下をも参照。D. Hartman, *Maimonides* (注16参照), 154-5, 250 (n. 39); I. Twersky, *Introduction to the Code of Maimonides*

(注16参照), 452-3; Novak, *The Treatment of Islam and Muslims* (注42参照), 239-40.

[Abstract]

Maimonides' View of Religions

Tetsuo YAMAGA

For Moses Maimonides, who was one of the greatest leaders of medieval Judaism, it is axiomatic that Judaism is the only true religion. But for him Judaism is not a national religion for Jewish people only, but a world religion open to all mankind because he accepts conversion to Judaism positively and admits full equality of proselytes in regard to salvation so long as they keep the Jewish law. For Maimonides, Jesus was only a false prophet and Muhammad was “a mad man” and the historical reality that Jews have long been kept under the control of Christians and Muslims is interpreted by him as a punishment by God for the sins of the Jews, which will not last forever. The Christian doctrine of the Trinity violates the oneness of the true God and is seen as a form of polytheism. In this regard, Islam as a pure monotheistic religion stands nearer to the truth. But Maimonides sets a higher valuation on Christianity than Islam, so long as the former acknowledges the authority and canonicity of the Hebrew Bible. According to Maimonides, both religions are only lesser imitations of Judaism, the true religion. However, the worldwide spread of Christianity and Islam has a historically positive function so long as they inform heathens of the monotheistic idea of God and/or biblical conceptions such as Torah, Messiah, and commandments, preparing heathens for the end of time in which the true meaning of those ideas will be revealed to them.

key words : Maimonides, Judaism, Seven Commandments of Noah, Mishneh Torah

